

「鬼」とオニ

山口 建治

はじめに

中国では外国の侵略者を「鬼子」と蔑称する。中国滞在中、ちよび髭をはやした小柄な日本兵の「鬼子」が悪役として登場するテレビドラマをよく見かける。この「鬼子」をオニと訳すとちよつと違和感がある。日本のオニには「鬼（おに）に金棒」という諺、また鬼嫁・鬼あざみなどの語があるように、大きくて強いというニュアンスがあるからだ。

あらためていうほどのことではないかも知れないが、中国語の「鬼」の意味と日本語のオニの意味との間には大きなちがいがある。中国語の「鬼」は人が死んだ後の靈魂、亡魂亡者の意であるのに対し、日本語のオニは、想像上の怪物で頭に角をはやし、筋骨隆々なのが一般的な姿である。同じ漢字を用いる言葉の意味に、日中間でこのような違いが生じたのはどうしてか、という素朴な疑問を懷いてからだいぶ経つ。今、その疑問を解く鍵となりそうなことを記して、大里教授退職記念号に寄せる一文とする。

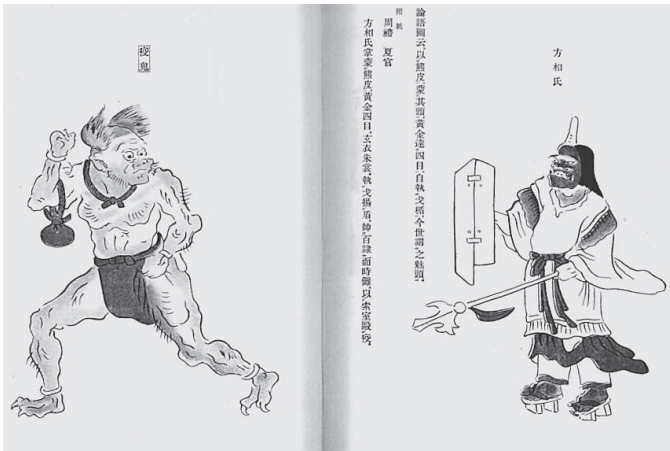


図 1

— 『政事要略』 追儼条の疫鬼

古代の中国では、疫病は「鬼」がもたらすものと考えられていた。それで疫病をもたらす「鬼」はとくに「疫鬼」と称され、疫病それ自体も「鬼疫」と称された。古代中国では疫と鬼は密接不可分の関係でむすびついていたのである。その疫鬼をはらう儀礼を中国では大儼と称し、日本の宮廷でもそれを真似た祭祀が行われた。

惟宗允亮の編著一〇〇二年の成立の『政事要略』という平安時代の政務法制書がある。その追儼の条に方相氏と疫鬼の図が載るが、図1で示すように疫鬼を追いはらう方相氏よりも、疫鬼が大きく描かれている。

疫鬼がこのように方相氏より一回り大きく描かれるのは、日本人のイメージによるものと考えられる。中国の疫鬼は人よりも小さく描かれるのが普通だからである。たとえば、図2は、唐・呉道子の作と伝えられる「鍾馗扶目図」であるが、鬼の背



図 2



図 3

丈は鍾馗の半分ぐらいである。

図3は奈良国立博文館蔵の辟邪絵のうちの一つの鍾馗図である。この絵は日本で描かれたもののようにだが、中国の絵を模本にして描いたらしく、よく似た構図の鍾馗図が元刊の『連相搜神廣記』の鍾馗の条にある。両



図 4



図 5

図の鬼は「鍾馗扶目図」の鬼よりもっと小さく、鬼は惨めにも目の玉をくり抜かれようとしている。図5は二〇一〇年、筆者が上海滞在中に開かれた鍾馗画展覧会に出品されたものの一幅であり、小鬼が鍾馗に踏みつけられている。この展覧会に出品された鍾馗画の大半が、このような鍾馗が小鬼を踏みつける絵であった。

儼文化研究者の康保成先生も、儼儀でなげ子ども（仮子）が登場するのかといえば、要するにそれは「鬼」が子どもの姿だったからだと述べている（『儼戯芸術源流』。「鬼」は小さいものというのが中国の人にとっての常識だった。

二 オニ（鬼）が大きくて強そうなのはなぜか

中国の「鬼」が小さいのに、日本のオニが大きくて強そうになったのはオニの語源にかかわる、と筆者は考えている。『政事要略』の疫鬼は我々が普通想像するオニの姿にちかい。まるで角のような髪があり、禪姿、動物の爪のある足など、どうみても人とは思われない怪物そのものである。この「疫鬼」の姿が我々が通常想像するオニに近い。それならこのオニという語はどこから来たかということのだが、中国の南方では疫鬼のことを瘟鬼と称したので、この瘟鬼がオニになったのであろうというのが私の説である。

南北朝のころの民間に、（福建や台湾には遺存するが）今ではほとんど忘れ去られた瘟神の五帝五霊祭祀と云うのがあり、それがおそらく密教にとりこまれ、我が国に伝えられ、儼オニヤライ（＝「遣瘟」と称された。その詳細をここに述べる余裕はないが、オニの姿が大きくなったのは、このころの瘟神祭祀が我が国にもたらされたからだと考える。くわしくは、神奈川大学非文字資料研究センター刊『年報 非文字資料研究』一〇号に寄稿した拙論「唐代瘟神『五帝』考―御霊信仰の源流―」を参照されたい。

天死した顓頊の子どもが疫鬼になったという伝説があるように、疫鬼はもともと小さい「鬼」であった。

南北朝時代に、それらの疫鬼を統率し無体な働きをさせないよう、「敗軍死将」の亡魂を瘟神に祀りあげ、疫病の蔓延を防ごうとする祭祀が行われるようになった。日本では「敗軍死将」に替え、政治上の失脚者すなわち非業死した支配者の亡魂を怨霊と呼び、それを御霊として祀るようになった。これを主導したのが密教僧であつたらしい。日本語でオニという場合は、疫病を流行らせる実行部隊の疫鬼（瘟鬼）を指すだけでなく、疫鬼（瘟鬼）の統率者たる怨霊（疫神・瘟神）を指す場合があつたということだ。鬼の世界（冥界）のことは、その統率者たる鬼王・鬼将に委ねるしかなく、冥界でそうした役に就けるのは、やはり在世中に帝王将相であつた者に若くはない、という考えに基づくのであろう。

日本の中で疫鬼や怨霊が顕在化するのには八世紀後半からであるが、オニの語が立ちあらわれるのもほぼこのころからである。万葉集の漢文体の題詞などに出る「鬼」一字の語はすべていわゆる「疫鬼」を意味しており、ここにオニという語の兆を見ることが出来る。オニは「見た目の和語」であり、じつは民間漢語（瘟の字音）に由来することばであつた。平安時代を通じ疫神（瘟神）祭祀である御霊会（御霊信仰）が普遍化顕在化するが、たんに国内だけの孤立した事象として見るのは、ことばの面からいっても正しくない。

瘟神信仰は南北朝時代に形成されはじめるが、道士たちによる五帝祭祀あるいは五霊祭祀の形をとるのは、やはり隋唐以降のことである。それがのちに中国南部の五瘟神の信仰へと発展するのだが、その五瘟神と今日の福建や台湾で遺存する五帝や五霊の祭祀とのつながりは最早ミッシングリンクとなつて、実態がよく分からなくなっている。唐から宋にかけての九一〇一世紀の間、中国の民間で瘟神信仰がどのように発展したかは、文献上はおそらくほとんど空白であり、日本の御霊信仰を瘟神伝播の視点から洗い直せば、その空白を補える

のではないかと妄想している。

七～八世紀、中国では「敗軍死将」を五瘟神（五は多数の意味で必ずしも実数の五ではない）として祀り、日本では政治上の失脚者の怨霊を御霊（御霊は五霊と称される場合もあり、本来は五霊が正しい表記であったろう）として祀る、疫神祭祀が行われた。双方とも五霊を饗応して祀り、その神像を船に載せて送り出す、など類似する儀礼が少なくない。日本では怨霊を慰撫・鎮魂することにより、疫病などの災害を避けようとしたと説明されることが多いが、むしろ怨霊をお願いして、そのパワーを借りてその配下の疫鬼をはらったり、連れて出て行ってもらったりした、というのが真相に近いのではなからうか。ともあれ怨霊・御霊は中国の五瘟神の信仰が伝播して土着化したものの、その一変異と考えられるのではないかというのである。

『政事要略』に描かれた疫鬼オニの姿が大きいのは、疫鬼がたんに追いはらわれる弱々しい「鬼」ではなく、権力の座から追放された怨霊、その悲運ゆえに人々の同情を買い、疫鬼の統率者として招き降ろされた疫神・瘟神の姿であったからではなからうか。『政事要略』の疫鬼はたしかに逃げてはいるが、慌てふためいている様子はなく、余裕綽々と悠然として立ち去る風情に見える。この「疫鬼」は、追儼という儀礼の場に招き降ろされた、人々のイメージのなかの瘟神（オニ）の姿であったのではないかというのが、筆者の考えである。

蛇足ながら、平安時代の初期には撥音ンはまだ顕在化しておらず、怨霊はオニ・リヤウと発音されたであろうから、非文字世界に暮らす民衆には、否応なくオニは怨霊オニ・リヤウと重なるところがあったのである。

図の出所

図1 国史大系第二八卷『政事要略』吉川弘文館

図2 『百種図説 中国歴代名画点読』上海画報出版社

図3 『週刊日本の美をめぐる』no.4『地獄草子と餓鬼草子』小学館

図4 『新編連相搜神廣記』臺灣學生書局

図5 中華鍾馗文化研究会主催「全国首届鍾馗画大賽獲獎作品と靈壁裝飾石珍品展」二〇一〇年十一月一七日
から二一日、上海雲州古玩城（筆者による撮影）

小稿を提出後、北京大学劉琳琳氏の論文「日本古代国家疫病祭祀中的鬼神觀念」を読んだ。日本古代の疫病祭祀には、中国の疫鬼觀念が導入されているが、日本固有の神觀念にもとづいて「鬼」を神として遇する変容が見られるという。日本では疫鬼が疫神として遇されたという指摘は、小稿の主張とおなじである。しかし、それをもっぱら日本の固有の神觀念にもとづく「鬼」の神化と捉える劉氏と違って、中国南方ですでに正神化しつつあった「瘟神」が伝わったからだ、とするのが筆者の考えである。